

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

共起する連体修飾成分の観点からみた類義語：
「気分」と「気持ち」を例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-10-18 キーワード (Ja): 類義語, 「気分」と「気持ち」, 連体修飾, 共起関係, 動詞句と名詞の関係 キーワード (En): 作成者: 光信, 仁美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007708

共起する連体修飾成分の観点からみた類義語

— 「気分」と「気持ち」を例として —

光 信 仁 美

要 旨

本稿は、類義語「気分」「気持ち」について、それぞれの語の意味の成立およびその歴史的な変化の考察はひとまず措き、現代日本語の共時態において、共起する連体修飾成分を分析し、その文法的なふるまいに照らしあわせるかたちでそれぞれの意味的特徴を考察したものである。

両者で文法的なふるまいが異なるのは、連体修飾成分が「名詞＋の」である場合の共起成分、さらに、動詞述語句である場合における当該述語句の「気分」「気持ち」への関係のしかた等である。

本稿では以上について、文法的な特徴と意味的な特徴を相即するかたちで分析したが、この方法を練り上げることは、意味・機能を一体として連体修飾のあり方を究明することに寄与するものと考えている。

キーワード：類義語、「気分」と「気持ち」、連体修飾、共起関係、動詞句と名詞の関係

0. はじめに

たとえば、「増える」「上がる」は共起する名詞の種類がそれぞれ異なる。「増える」は量的な性質のある名詞と、「上がる」は程度的な性質のある名詞と共起する。

雑草 事故 体重 資産 課題 ……が 増える

気温 スピード 成績 物価 投票率 ……が 上がる

「顔だち」「顔つき」は共起する形容詞の種類が異なる場合があり、人の顔の見た目の性質を表す形容詞は双方と共起するが、感情を表す形容詞は、「顔つき」とは共起するが「顔だち」とは共起しない。

端正な 温厚な 柔和な 綺麗な 知的な 精悍な …… ○顔つき ○顔だち

真剣な 神妙な 不機嫌な 不安な 心配な 複雑な …… ○顔つき ×顔だち

このように、単語の意味の特徴は共起する他の文の成分の特徴に反映する¹⁾。

「気分」「気持ち」はどうであろうか。次のように、連体修飾語の中に、双方と共起するものと、どちらか一方としか共起しないものがあるようである。

不安な 憂鬱な 幸せな 嬉しい 寂しい やさしい …… ○気分 ○気持ち
不安の 安堵の 喜びの 後悔の 感謝の 嫌悪の …… ×気分 ○気持ち
連体修飾句との共起関係についても同様である。()は連体修飾成分、以下同様)

○太郎はそんなことはどうでもいい気分だった。

○太郎はそんなことはどうでもいい気持ちだった。

×次郎はついに仕事をやめる気分になった。

○次郎はついに仕事をやめる気持ちになった。

本稿は、以上のような共起する連体修飾成分の文法的な特徴と照らしあわせるかたちで、類義語の意味特徴を分析し、その相違を考察するものである。具体的には「気分」「気持ち」を一つのモデルケースとしてとりあげる。もっとも、本稿の根底にあるのは連体修飾句内の述語のふるまい方への関心である。類義語の意味特徴にかかわる連体修飾成分の文法的な特徴をとらえることで、文末述語の場合とは異なる、連体修飾句内の述語のありかたの解明に寄与することをもう一つの目的としたい。

なお、連体修飾節と被修飾名詞との関係については寺村（1975-1978）の研究が知られているが、それとは別に、高橋（1979）は連体動詞句と被修飾名詞の意味的な関係からみた類型を提示している。だが本稿では、連体修飾研究それ自体における分析の観点の差異などの検討はひとまず措き、第2節（連体修飾成分が述語句の場合）と第3節（「という」「ような」で連結される修飾句の場合）の考察において、高橋（1979）の分析に多くを負っている。

また、「気分」「気持ち」の意味・用法の違いに関する研究はいくつか散見される²⁾が、いずれも「気分」「気持ち」それぞれの派生的な意味を含む語義全体を考察の対象としている点、本稿が、次（0.1）にあげるように、類義的な一つの意味に限定してその用法の違いを考察しているのと大きく異なっている。また、それらの結論は本研究の結論と対照させるだけの網羅性と実証性をもっていないので、本稿では論及しない。

本稿の考察は稿末にあげる資料から収集した用例をもとに、それらを分類することによって帰納的に結論を導き出そうとしたものである³⁾。ただし事象によっては国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ という）を用いて検証を加えている。

0.1 考察の対象

本稿で考察の対象とするのは、次のような「気分」「気持ち」に共通する、人の心に関係する意味における相違である。

(1) 自分達の胸には何となく快活な気分が往来している。（小僧の神様）

(2) 私も笑いを返したが寂しい気持は消えなかった。（一瞬の夏）

二つの語の意味の相違については、徳川宗賢・宮島達夫編（1972）『類義語辞典』（p.128～

p.129) に記述がある。「気持ち」の類義語として「こころもち」「気分」「こころち」があげられ、それらの違いについて記述されているが、以下に「気分」と「気持ち」の違いについて書かれている箇所を引用する。(下線は引用者)

「気分」は抽象的で、快適・不愉快・くらい・ほがらかな、などとしかいいえない、ほんやりした「気持ち」をいう。だから「若い連中がなにを考えているのか、わからない」という意味で、「若いものの気持ち(こころもち)はわからない」といえるのに対し、「若いものの気分は……」とはいえない。「気持ち」や「こころもち」は、この例のように、考えている内容まであらわすので、単なる感情ではない。このうち、「気持ち」は、具体的な意志・希望まであらわしうるが、「こころもち」は、抽象的・形式的にあらわすにすぎない。「あいての気持ちを察する」「女王にでもなったような気持ち」などは、「こころもち」でいいが、「金がほしい(かれにきてもらいたくない・はやく雪がふればいい)」という「気持ち」のようなばあいは、「こころもち」では、いいにくい。

以上をまとめると、その意味の違いは、「気分」が抽象的でほんやりした「気持ち」をいうのに対し、「気持ち」は考えている内容まで表し、また、その内容として具体的な意志や希望まで表すことができるということであるが、はたしてそうであろうか。本稿ではこのような指摘からひとまず中立の立場をとり、その成否について文法との関係で検討する。

0.2 考察の順序

考察は、連体修飾成分として主に形容詞・形容動詞・名詞が用いられる一語による場合(第1節)と、動詞や文の述語形式などが用いられる述語句による場合(第2節)、語や述語句が「という」「ような」で連結される修飾句の場合(第3節)に分けておこなう。これらを分けてあつかうのは、それぞれの場合で「気分」「気持ち」の修飾成分の差異の特徴に違いがみられるからである。

〈連体修飾成分が一語である場合〉

- (1) 自分達の胸には何となく快活な気分が往来している。(小僧の神様)
- (2) 私も笑いを返したが寂しい気持は消えなかった。(一瞬の夏)
- (3) 信子の言葉は優しく鮎太の気持を揺すぶったが、…(あすなろ物語)

〈連体修飾成分が述語句の場合〉

- (4) 何となくお互いに戦果を自慢する気分ではなかった。(風に吹かれて)
- (5) しかし私はやはり書かずにはいられない気持ですし、…(沈黙)

〈連体修飾成分が「という」「ような」で連結された述語句の場合〉

- (6) どうでもいいやという気分になって、お道化で茶化したり、…（人間失格）
(7) かなり長時間を要したような気持がする。やがて地面の上に立つことが出来た。

（黒い雨）

なお、第1節であつかう一語とは、形容詞・形容動詞・名詞の場合であるが、連体修飾成分が動詞一語による場合(8)(9)がある。これらの場合は、次のように、動詞が補語をとって述語句をつくっている場合(10)(11)と、「気分」「気持ち」の修飾成分の差異のうえで同じような特徴がみられるため、連体修飾成分が述語句の場合（第2節）の中であつかう。

- (8) いい位の疲労と満腹とで私は珍しくゆったりした気分になっていた。（小僧の神様）
(9) いや、これで内藤が頑張る気持になってくれるんだったらいいんだよ」（一瞬の夏）
(10) マニサでの日常も、以前のそれとは、まったくちがった気分に支配されるものであったにちがいない。（コンスタンティノーブルの陥落）
(11) …彼のことを「ちんちくりん」などと評する気持は露ほどもなかった。（楡家）

また、動詞に接尾辞「たい」を付加してつくられる願望を表す形容詞も、次のように一語で用いられる場合(12)と補語をとって述語句をつくる場合(13)がある。いずれも「気分」「気持ち」に対して、形容詞述語句による修飾の場合(14)(15)と、「気分」「気持ち」の修飾成分の差異のうえで同じような特徴がみられるため、連体修飾成分が述語句の場合（第2節）の中であつかう。

- (12) 遊びたい気持に勝たなければ駄目、克己って言葉知っている？」（あすなろ物語）
(13) 「ニューヨークのにおいをかぎたい気分になってきたよ」（人民は弱し官吏は強し）
(14) 「…今はもう、そんなことどうでもいい気分になってるんだから」（一瞬の夏）
(15) 鮎太は…、それを中止されたのが惜しい気持だった。（あすなろ物語）

1. 連体修飾成分が一語である場合

名詞「気分」「気持ち」は形容詞・形容動詞（以下、形容詞・形容動詞を一括して形容詞という）の連体形および名詞の連体の形「名詞＋の」によって修飾される。以下、形容詞、名詞の順にみていこう⁴⁾。

1.1 形容詞による修飾の場合

形容詞は意味的・文法的性質から感情形容詞と属性形容詞に分けられる。感情形容詞とはヒトの感情や感覚を表し、述語に用いられると、①感情が向かう対象を表すガ格の名詞をとり、②言いきりの形で用いられた場合に、主語が一人称に制限される。さらに、③「～がる」をつけて動詞を派生することができる形容詞である。属性形容詞はヒトやモノの性質を表す形容詞

で、感情形容詞のような文法的性質をもたない形容詞のことである⁵⁾。

- ① 私は 太郎の親切が うれしかった。
- ② ○私は うれしい。 ×太郎は うれしい。
- ③ ○うれしがる ○悲しがる ×大きがる ×高がる

このような文法的な違いをもったそれぞれの形容詞との共起関係において、「気分」と「気持ち」のあいだに違いはみられるだろうか。

〈感情形容詞〉

(16) 夏の終わり近くなっても、憂鬱な気分は去ろうとしない。(一瞬の夏)

(2) 私も笑いを返したが寂しい気持は消えなかった。(一瞬の夏)

〈属性形容詞〉

(1) 自分達の胸には何となく快活な気分が往来している。(小僧の神様)

(17) 二つの水蜜桃を食べ終えたことに徹吉は満足し、必要以上に豊かな気持になった。

(楡家の人びと)

一見して両者に違いはみられないようである。収集した用例から形容詞の例を「気分」「気持ち」それぞれの場合についてリストアップしてみよう。

「気分」〈感情形容詞〉

いやな ふしぎな みじめな むなしい やりきれない 楽しい 心細い 辛い
不安な 憂鬱な 後ろめたい 誇らかな 爽快な 爽やかな 快適な 億劫な
うっとうしい 幸せな 気詰まりな (異なり19 (31%))

〈属性形容詞〉

いい いかげんな 悪い 暗い 妙な 奇妙な 重苦しい 絶望的な 変な
おかしい ぎこちない ぜいたくな たよりない まともな スリリングな
悪くない 陰鬱な 快活な 懐古的な 恩恵的な 気楽な 狂暴な 慌ただしい
刺激的な 自堕落な 幸福な 若い 軽薄な 弱々しい 重々しい 情緒的な
中ぶらりんな 陽気な 投げやりな 闘争的な 賑やかな 不安定な 悲観的な
不吉な 名状しがたい 暢気な 落ち着かない 諧謔的な (異なり43 (69%))

「気持ち」〈感情形容詞〉

いやな ふしぎな みじめな むなしい やりきれない 楽しい 心細い 辛い
不安な 憂鬱な 後ろめたい 誇らかな わびしい うとましい おぞましい
くすぐったい けだるい にがい 堪まらない 恐ろしい 苦しい 寂しい
情けない 得意な 悲しい 不快な 涼しい やましい 眩しい 信じられない
(異なり30 (36%))

〈属性形容詞〉

いい いいかげんな 悪い 暗い 妙な 奇妙な 重苦しい 絶望的な 変な
 そぐわない ちぐはぐな ほのかな みずみずしい やけくそな やさしい
 わがままな 安易な 暗鬱な 一筋な 遠い 感傷的な 軽い 甘美な 客観的な
 空虚な 敬虔な 激しい 孤独な 好意的な 自然な 自由な 捨て鉢な 殊勝な
 重い 純一な 純朴な 新しい 真剣な 親しい 素直な 調和的な 珍しい
 破滅的な 白々しい 卑怯な 不活発な 複雑な 平気な 平静な 豊かな
 満足な 露悪的な 曖昧な 贅沢な (異なり54 (64%))

これらのリストから、まず感情形容詞と属性形容詞の使用率(%)において、「気分」と「気持ち」のあいだに有意な違いはみられないようである。「気分」の場合、感情形容詞と属性形容詞がそれぞれ31%と69%であるのに対し、「気持ち」の場合は36%と64%である。また、感情形容詞に「気分」「気持ち」の双方と共に起る形容詞(____部)とそうでないものがあるが、一方にしか現れていないものも他方を修飾しうる。属性形容詞の場合にも、「気分」「気持ち」の双方に現れているものは少ないが、各々に分類されている属性形容詞には、その共起関係に違いがあるような意味的な特徴がないというのが当面の結論である⁶⁾。

感情形容詞も属性形容詞も修飾語として用いられれば被修飾語「気分」「気持ち」の属性を表しており、「気分」「気持ち」の内容をさししめしてはいない。しかし、感情形容詞が「という」を介して名詞を修飾するとき、内容を表すことになる。ただし、この関係が成立するのは被修飾語が「気持ち」の場合である。先回りしていえば、「気分」とちがって「気持ち」はその内容まで表しているという徳川・宮島(1972)の指摘を裏付けるものかもしれない。

- 楽しいという気持 ○むなしいという気持
 ×楽しいという気分 ×むなしいという気分

BCCWJの検索では「感情形容詞+という気分」の例はなく、「感情形容詞+という気持ち」に次のような例があった。

- (18) 嬉しいという気持ちは溢れるほど伝わってきたが…

(菅笠みのり・君、私の頭上で輝けり)

- (19) 悔しい…という感情よりは、寂しさが強く。寂しいという気持ちよりは、泣きたくなるほど腹が立ってくる。(鷹野京・ドラマチックに恋をしよう)

感情形容詞が「という」を介して用いられ、「気持ち」とのみ内容を表す意味関係をつくる点、修飾成分として述語句が「という」を介して用いられる場合と異なっている。後者の場合については第3節で詳しく述べるが、述語句が「という」を介して用いられる修飾成分は、「気分」「気持ち」の双方を修飾することが可能である。ただし、使用率は「気分」より「気持ち」を修飾するほうが高い⁷⁾。

1.2 名詞による修飾の場合

次に名詞の連体の形「名詞＋の」による修飾の場合をとりあげる。このとき名詞が、主体、時、様態・程度、動作を表す場合と、感情あるいは感情的な態度を表す場合とでは共起関係に違いがみられる。前者では「気分」「気持ち」の双方と共起する。

〈主体〉

(20) 彼女に会ったおかげで私の気分はずいぶん良くなった。(世界の終り)

(3) 信子の言葉は優しく鮎太の気持を揺すぶったが、…(あすなろ物語)

〈時〉

(21) どうだ、今の気分を、倦人に聞かれたら、何と説明しようか、…(太郎物語)

(22) そのときの気持は話したってわかるものじゃない。(楡家の人びと)

〈様態・程度〉

(23) こんな上乘の気分は子どものとき以来である。(ブンとフン)

(24) …僕には寧ろ反対の気持になった経験しか憶出せない。(檸檬)

〈動作〉

(25) 衛生局の役人たちの頭には、星を応援した総督府への仕返しの気分もあったにちがいない。(人民は弱し官吏は強し)

(26) それを切り出す以上は、領土拡大の気持が無いことをよく説いて…(山本五十六)
しかし、感情あるいは感情的な態度を表す名詞は「気持ち」だけと共起して用いられる。

(27) はくは自分の印象に軽い不安の気持を抱きながら、…(パニック)

(28) 怒りや憎しみの感情は持っていないが軽蔑の気持はどうしても…(沈黙)

(29) いつしか彼らに対して嫌厭と警戒の気持を抱くようになったのも…(楡家)

感情あるいは感情的な態度を表す名詞には、このほか「非難の 嫌悪の 絶望の いたわりの 馴染みの 腹立ちの 感謝の 安堵の 憐みの」などが用例としてみられた。

感情や感情的な態度を表す名詞が「気持ち」を修飾するとき、その名詞は「気持ち」の内容を表していると言ってよいだろう。この「気持ち」の位置に「気分」がたたないということも、「気分」とちがって「気持ち」はその内容まで表しているという徳川・宮島(1972)の指摘を裏付けるものであろう。

また、前節でみた感情形容詞との違いが興味深い。感情形容詞の修飾をうけた「気持ち」は、コピュラ「だ」や機能動詞⁸⁾「する」を用いて、主語で表される主体とその心的な状態を表す文の述語となりうるのに対し、感情を表す名詞が修飾する「気持ち」はそのような意味関係をもつ文の述語となりえない。

○太郎は不安な気持ちだった。≡太郎は不安だった。

○太郎は不安な気持がした。≡太郎は不安だった。

×太郎は不安の気持ちだった。

×太郎は不安の気持ちがした。

2. 修飾成分が述語句の場合

連体修飾成分の述語句には、品詞の観点からみると二種類のものがある。一つは形容詞述語および形容詞的变化の述語形式（ナイ形）のもの(30)(5)であり、もう一つは動詞および動詞述語のもの(8)(31)である。以下、前者を形容詞述語句、後者を動詞句とそれぞれまとめてよぶことにする。

(30) いい位の疲労と満腹とで私は珍しくゆったりした気分になっていた。これから仕事で夜を明かすには惜しい気分だった。(小僧の神様)

(5) しかし私はやはり書かずにはいられない気持ですし、…(沈黙)

(8) いい位の疲労と満腹とで私は珍しくゆったりした気分になっていた。(小僧の神様)

(31) いまは、母を愛する気持よりも、煩わしく思う気持の方が強かった。(青春の蹉跎)

動詞句と名詞の意味関係はヴァリエーションに富んでおり、形容詞述語句と名詞の意味関係はその一部に含まれる。そこで、動詞句と名詞の意味関係のタイプをもとに「気分」「気持ち」との共起関係について考察する。

ところで、連体修飾する動詞句と名詞との関係を高橋（1979）は次の①関係づけのかかわり、②属性づけのかかわり、③内容づけのかかわり、④特殊化のかかわり、⑤具体化のかかわり、の五つに類型化した⁹⁾。

本稿ではこの五つの意味関係の類型を用いて、「気分」「気持ち」との共起関係の考察をおこなう。まず以下に、この類型にしたがって本稿で採取した「気分」「気持ち」の用例を示す。なお、具体的に用例を検討してみると、当然ながら重なり、つまり複数の意味関係に相当すると思われるようなケースが存在する。しかしながら、ここでの目的はすべての用例を重なりなく網羅的に分類すること、あるいはそうした排他的かつ網羅的な分類の枠組みを提示することではない。それゆえ、以下の例はそれぞれの意味関係の典型としてとらえたものである。

①関係づけのかかわり

関係づけのかかわりとは、動詞にテンス・アスペクト・ヴォイスなどの動詞性があり、名詞がさしめすものごとが、動詞が表す動作や状態の参加者や状況（時・場所など）である場合のかかわりをいう。次の例の「気持ち」はそれぞれ「おさえていた」「抱いた」の動作参加者（対象）の関係にある。

(32) せっかくおさえていた気持を、むりやり掻きたてられたようで、…(砂の女)

(33) そして彼女の信念は、同時に大多数の従業員一同が抱いた気持だったのだ。(楡家)

②属性づけのかかわり

属性づけのかかわりを表す動詞句は名詞がさししめすものごとの属性を表している。関係づけのかかわりを表す場合の動詞は、特定の時間におこる動作を表しているのでテンスをもつが、属性づけのかかわりを表す動詞にはテンスがない。

(8) いい位の疲労と満腹とで私は珍しくゆったりした気分になっていた。(小僧の神様)

(34) 鮎太は、晴れ晴れとした、しかしどこか淋しさのある気持で、人目につかぬように山を降りて行った。(あすなろ物語)

③内容づけのかかわり

内容づけのかかわりは動詞句が名詞の内容を表している場合をいう。

(35) ぼくは…、愛の告白でもしている気分になっていた。(聖少女)

(11) …彼のことを「ちんちくりん」などと評する気持は露ほどもなかった。(楡家)

④特殊化のかかわり

動詞句の表すことがらが名詞のさししめすものごとの下位概念を表している場合である。次の「愛する」「煩わしく思う」「恨む」は感情を表す動詞であり、「気持ち」とは「下位概念－上位概念」の関係にある。

(31) いまは、母を愛する気持よりも、煩わしく思う気持の方が強かった。(青春の蹉跎)

(36) 親を恨む気持も何も起らなかった。(華岡青洲の妻)

⑤具体化のかかわり

動詞句の表すことがらが名詞と「下位概念－上位概念」にあるのではなく、名詞のさししめすものごとを具体化したものであるという関係をいう。

(37) とくに、寝汗でうるけた皮膚に、砂がはりつく気分は、なんともやりきれたものではない… (砂の女)

(38) …きっと純子のアイデアだろうが、その守り立ててくれる気持ちが、嬉しかった。
(女社長に乾杯！)

以上の5つの関係¹⁰⁾のうち、使用例は、②属性づけのかかわり、③内容づけのかかわり、④特殊化のかかわり、が大半を占めている。①関係づけのかかわり、⑤具体化のかかわりの例は少なく、分析に足りていない。したがって、前者三つの場合を以下に考察する。後者二つの場合については今後の課題とする。

2.1 属性づけのかかわり

属性づけのかかわりでは、すでに述べたように動詞にテンス的な意味がない。このような動詞句は「気分」「気持ち」の性質を表しているといえよう。

(8) いい位の疲労と満腹とで私は珍しくゆったりした気分になっていた。(小僧の神様)

(34) 鮎太は、晴れ晴れとした、しかしどこか淋しさのある気持で、人目につかぬように山を降りて行った。(あすなろ物語)

この意味関係は形容詞による修飾(たとえば「穏やかな気分」「明るい気持ち」)に準じたもので、動詞句は形容詞化している。この用法において「気分」「気持ち」の共起関係に相違は認められない。ただし、これは第3節で考察する「ような」を介して連体修飾する用法の原型であり、「ような」を介した連体修飾では共起関係に差異があるので、対照のために例をあげておく。

(39) 今までの妙にちぐはぐになった気分から、…云い出す気にはなれない…(小さき者)

(40) 書き疲れて、ぐったりした気分ですが、…(錦繡)

(41) …を考えると、伊木一郎は尻込みする気分になってしまった。(砂の上の植物群)

(42) そうして、にがいような乾いた気持をもって、自転車のペダルを踏み…(楡家)

(43) 怨みに似た気持を抱いていることに、徹吉は自分ながらあきれ、(楡家の人びと)

(44) 私はふつふつとたぎる気持を抑えて、フレイジャーの話をはじめた。(一瞬の夏)
次のように、説明的に表現される場合や比喩的に表現される場合もある。

(45) 着物によって自分を飾りたいという女の執念を捨てた気持だった。(青春の蹉跎)

(46) いきなり、一つの明るい光にぶつかった気持であった。(あすなろ物語)

2.2 内容づけのかかわり

動詞句が「気分」「気持ち」の内容を表す関係をつくっている場合について、まずここでは、動詞句の述語動詞が意志的な意味を表しているもの((4)(11))と、非意志的な意味を表しているもの((35)(47))に分けて考えてみたい。意志的な意味を表しているというのは、動詞を「～シヨウという」「～シヨウとする」のような意向形を用いた言い方におきかえることができるものをいう。

(4) 何となくお互いに戦果を自慢する気分ではなかった。(風に吹かれて)

≒戦果を自慢しようという気分

(11) …彼のことを「ちんちくりん」などと評する気持は露ほどもなかった。(楡家)

≒彼のことを「ちんちくりん」などと評そうとする気持

(35) はくは…、愛の告白でもしている気分になっていた。(聖少女)

(47) 能鳥さんは誇を傷つけられた気持であつたろう。(黒い雨)

動詞句の意味が意志的か非意志的かによって、以下のように「気分」「気持ち」との共起関係の差異の特徴が異なる。

2.2.1 意志的な意味を表す述語句の場合

動詞句が意志的な意味を表す場合の、「気分」「気持ち」との共起関係を検討しよう。

まず「気分」と共起する場合をみてみると、次にあげる例のように、「気分ではない」「気分にはならない」などの形で、否定的な意味の述語として用いられることが多い。

- (4) 何となくお互いに戦果を自慢する気分ではなかった。(風に吹かれて)
- (48) …なんだかもうキャバレーへ行く気分ではなくなっていた。(新橋烏森口)
- (49) 徹吉は笑ってビールの杯をあげてみせた。しかし、…、彼はどうしても心から憂さを散じる気分になれないのであった。(楡家の人びと)
- (50) しかし太郎は、青木の両親や、辰彦当人を、非難する気もなく、同情する気分にもならなかった。(太郎物語)
- (51) …過分の重任に際しなかなか筆とる気分も出で兼ね失礼致居候 (山本五十六)

一方、「気持ち」を修飾する場合、必ずしも否定的な述語をつくるわけではない。否定的な述語を伴う例(11)(52)だけではなく、否定的でない述語を伴う例(53)(54)(55)もある。

- (11) …彼のことを「ちんちくりん」などと評する気持は露ほどもなかった。(楡家)
- (52) ぼくは自分の生徒をコンクールに応募させる気持にはなれなかった。(パニック)
- (53) 行くと決ってから、…会議に「全精神を傾倒する」気持になったらしいが、…
(山本五十六)
- (54) この年五月には、精神的転換を計るために、上京し、本所深川辺で労働者の間にまじって暮す気持でいたが果さず、…(檸檬)
- (55) それ以外の約束はしなかったし、約束することを避けようとする気持もあった。
(青春の蹉跌)

また、以上は動詞句の修飾をうけて作られた名詞「気持ち」が、コンピュータや機能動詞を伴って述語を形成する例であるが、「気持ち」は次のように名詞句となって主語や補語に用いられることも多い。

- (56) 書く気持がぐらついて来たのがその最初で、そうこうするうちに…(檸檬)
- (57) …駆けだせば駆けだせたかもしれないが、運を天に任せる気持を徹底させるつもりから駆けださなかった。(黒い雨)
- (58) 庇護にこたえる気持からか、山口は大田氏がパステル類やフィンガー・ペイントなどの新製品を発売すると…(パニック)
- (59) いったん蔵った手紙をとりだし、怖いものでも見る気持で、三たび読み、…
(楡家の人びと)

ちなみに、BCCWJで「～うとする気分／気持ち」「～うという気分／気持ち」の形を検索すると、使用数はそれぞれ次のとおりであった。

	「気分」	「気持ち」
～うとする	2 例	60例
～うという	8 例	175例

以上、「気分」は後に否定的な表現をとまう場合にかぎられ、また「～うとする」「～うという」に後続するのは圧倒的に「気持ち」が多いということから、総じて意志的な動詞句は主として「気持ち」を修飾するといえることができる。

2. 2. 2 非意志的な意味を表す述語句の場合

連体修飾句が「気分」「気持ち」の内容を表すもののうち、非意志的な意味を表す述語句には、主観的述語句(14)(15)と非主観的述語句(35)(47)がある。

- (14) 「…今はもう、そんなことどうでもいい気分になってるんだから」(一瞬の夏)
 (15) 鮎太は…、それを中止されたのが惜しい気持ちだった。(あすなろ物語)
 (35) ぼくは…、愛の告白でもしている気分になっていた。(聖少女)
 (47) 能島さんは誇を傷つけられた気持ちであつたろう。(黒い雨)

いずれのケースも、意志的な述語句の場合とちがって、共起する修飾句において「気分」と「気持ち」の間に差異はみられない。また、連体修飾をうけた「気分」と「気持ち」は、「～気分／気持ちだ」のようにコピュラをとまない文末名詞文¹¹⁾の述語になったり、「～気分／気持ちになる」「～気分／気持ちがある」など、機能動詞をとまって文の述部に用いられることが多いという特徴がある。次にそれぞれの場合をさらに詳しくみてみよう。

①主観的述語句の場合

ここでいう主観的述語句とは、次の例のように、言い切りの形で文が終わる場合、その主語が一人称に限られるような述語形式をもっている述語句のことである。

- (14) 「…今はもう、そんなことどうでもいい気分になってるんだから」(一瞬の夏)
 ○私はそんなことどうでもいい。
 ×太郎はそんなことどうでもいい。
 (15) 鮎太は…、それを中止されたのが惜しい気持ちだった。(あすなろ物語)
 ○私はそれを中止されたのが惜しい。
 ×太郎はそれを中止されたのが惜しい。

次のような述語形式の場合もこれに該当する¹²⁾。

- (60) (男は) ひどく納得のいかない気分だった。(砂の女)
 (61) (江藤は) それが何としても納得できない気持ちだった。(青春の蹉跎)
 (62) シャベっている藍子自身、どうも自分の言種に釈然としない気持ちだったが、(楡家)

このタイプの述語句が「気分」「気持ち」を修飾し、コンピュータや機能動詞を伴って文の述語となると、主語と述語の意味関係は、主体とその心的な状態を表す関係になっていることが多い¹³⁾。次のように、「気分」「気持ち」を連体修飾しない文とよく似た意味を表しており、「気分」「気持ち」の意味はうすれ、形式名詞化している。

(60) (男は) ひどく納得のいかない気分だった。(砂の女)

≡(男は) ひどく納得がいかなかった。

(61) (江藤は) それが何としても納得できない気持だった。(青春の蹉跎)

≡(江藤は) それが何としても納得できなかった。

ところで、動詞に接尾辞「たい」をつけると願望を表す感情形容詞が派生する。この形容詞述語句も主観的な表現であり、同様のことがいえる。

(62) 伸子は泣き出したい気分だった(女社長に乾杯！)

≡伸子は泣き出したかった。

(63) 鮎太はその時誰にでも話しかけたい気持だった。(あすなろ物語)

≡鮎太はその時だれにでも話しかけたかった。

タイ形容詞述語句の修飾をうけた「気分」「気持ち」が、コンピュータや機能動詞「なる」「ある」を伴って文の述語になった用例数を BCCWJ で調査したところ、次のようになっていた¹⁴⁾。

	「～たい気分」	「～たい気持(ち)」
総数	219例	606例
— だ	106例	53例
— になる	34例	45例
— がある	2例	88例

コンピュータ「だ」をともなった形式では「～たい気分だ」の形で文末名詞文の述語となることが多く、159例中106例が「気分」の述語となっている。また「気分」の中でみれば219例中106例と、約半数の用例が文末名詞文の述語となっており、「気分」は「気持ち」にくらべてこの関係をつくりやすいようである。

また、「ヒト(に)はモノがある」という所有を表す文の形式では、ほぼ「気持ち」が用いられている。徳川・宮島(1972)で指摘の、「気持ち」は「考えている内容まであらわす」ということと関係しているのかもしれない。

(64) 父にはあなたと私と結婚させたい気持があるのよ。(青春の蹉跎)

(65) (僕には) せめて矢須子だけでも逃げのびさせてやりたい気持があった。(黒い雨)

②非主観的述語句の場合

動詞述語句の動詞がシテイル形やラレル形をとることによって、「気分」「気持ち」の内容を

表す意味関係をつくることがある。

- (66) その女の姿態は、女から少女に戻っていた。と同時に、なまなましく女を感じさせるものでもあった。隠れずに傍に立っているのに、覗き見している気分があった。

(砂の上の植物群)

- (67) 俊一、お前も強至といっしょにたたかっている気持ちになるんだ。

(田中館哲彦・アタック・フューチャーズ！)

- (68) (太郎は) …、おふくろの手にのって、自白を強要された気分だった。(太郎物語)

- (47) 能島さんは誇を傷つけられた気持であつたろう。(黒い雨)

そのほか内容を表す意味関係をつくるものに、意識過程を表す次のような例がある。

- (69) 翌日、教室で使う教材を買いに出、あれこれと色素を選びながら、だしぬけに神仏に謝したくなる気分に彼はおちいった。(楡家の人びと)

- (70) 彼はこの頃それが妖術が使えるようになる気持だと思うことがあった。(檸檬)

2.3 特殊化のかかわり

「気持ち」を修飾する動詞句の中に、次の例のように動詞が「気持ち」の下位概念である感情を表し、「気持ち」と「下位概念－上位概念」の関係にあるものがある。

- (31) いまは、母を愛する気持よりも、煩わしく思う気持の方が強かった。(青春の蹉跎)

- (36) 親を恨む気持も何も起らなかった。(華岡青洲の妻)

- (71) 自分の名を惜しむ気持がちょっとでも出たらいかん。(山本五十六)

これらの例の、「愛する」「煩わしく思う」「恨む」「惜しむ」は「気持ち」を細かく類別した意味をもつ単語である。「気持ち」に属するものの何がしかを指定する、限定的な意味で「気持ち」を修飾している。

また、内容づけのかかわりの場合と異なり、特殊化のかかわりで修飾をうける「気持ち」は文の主語や補語になることが多い。さらにいくつか例をあげておく。

- (72) 彼の身を案じる気持など、毛ほども持ち合わせていないにちがいない。(砂の女)

- (73) 屈辱を恥じ入る気持さえ、トンボの羽に火をつけたような、あつけなさで、ちりちりと灰になってしまった。(砂の女)

- (74) 描きたいと思う気持を起させて、どしどし惜しまずにやれということでしょう？」

(パニック)

次の「あがめ尊ぶ」「見くだす」などは、感情的な態度を表す動詞であるが、このような動詞も同様の関係で「気持ち」を修飾している。

- (75) 加恵の幼い胸の中で於継を崇高なものとしてあがめ尊ぶ気持は信仰に似て齢とともにふくらんでいった。(華岡青洲の妻)

(76) 彼女にしてみれば、父から学費の補助を受けている貧乏学生として、江藤を見くだしている **気持**もあるに違いない。(青春の蹉跌)

以上のように、特殊化のかかわりの関係をつくる動詞句は主として「気持ち」と共起するが、「気分」を修飾しないわけではない。BCCWJには次のような例がみられる。

(77) 緒戦に、大力無双の悪来が敗れるはずもなく、帝紂は観戦を楽しむ **気分**でいた。
(芝豪・大公望)

(78) イヴが昔を懐かしむ **気分**になっていることはたしかだった。
(ノーラ・ロバーツ (著) / 岡田葉子 (訳)・愛と哀しみのメモワール)

しかしながら、感情を表す動詞の主な形式である「～む気分／気持ち」の形¹⁵⁾を同コーパスで検索してみると、次のように、異なり語数も延べ語数も圧倒的に「気持ち」を修飾する感情動詞が多かった。

		異なり語数	延べ語数
「気分」	楽しむ(6) 懐かしむ(1) 蔑む(1) 望む(1)	4 例	9 例
「気持ち」	懐かしむ(3) 親しむ(1) 楽しむ(7) 悔やむ(3)		
	羨む(3) 望む(8) 惜しむ(5) 憎む(2) 恨む(5)	22 例	60 例
	悼む(6) 悲しむ(4) 危ぶむ(1) いとおしむ(1)		
	慈しむ(2) 忌む(1) 悩む(1) 疎む(1) 蔑む(1)		
	頼む(2) 拒む(1) 待ち望む(1) ひるむ(1)		

2.4 まとめ ― 連体修飾句の場合 ―

以上、高橋(1979)の連体修飾する動詞句と名詞の意味関係の類型を用いて、動詞句と「気分」「気持ち」の意味関係の考察をおこなったところ、次のようなことが明らかになった。

共起関係に相違がみられるのは、動詞句が内容づけのかかわりと特殊化のかかわりで修飾する場合である。

内容づけのかかわりを表す動詞句の述語のタイプには、意志的な意味を表す動詞述語と非意志的な意味を表す述語があるが、意志的な意味を表す動詞句は主として「気持ち」を修飾する。「気分」を修飾する場合がないわけではないが、「気分ではない」「気分にならない」など後に否定的な述語をとまうということに限定される。

特殊化のかかわりを表す動詞句の述語は感情を表す動詞である。この場合、主として「気持ち」と共起し、類別された下位概念を表す動詞句が「気持ち」を限定的に修飾してその性質を表している。

3. 「という」「ような」で連結される修飾句の場合

「気持ち」「気分」に対する連体修飾句の中に、「という」「ような」で連結されるものがある。次にこれらの用法との共起関係にみられる差異について簡単にみておく。

「という」によって導かれる修飾句は「気分」「気持ち」の内容を表している。修飾句と名詞の関係は、前節（動詞句による修飾の場合）でとりあげた高橋（1979）の内容づけのかかわりにあたる。「という」が導く修飾句には次の例にみるように、モダリティー形式を伴う表現が多くみられる。

- (6) どうでもいいやという気分になって、お道化で茶化したり、…（人間失格）
- (79) …、ここ当分は仕事をしたくないという気分は変わらず、…（一瞬の夏）
- (80) 僕には工場の門限が適用しないので、今日はこの人たちと行動を共にするのが当然だという気持になっていた。（黒い雨）
- (81) …、その内、ちょっとやりすぎたかな、という気持ちになって来る。（女社長）
- (82) 「死ぬ気で、——少なくとも死んでもいいという気持で出て行かれたと思いますね。
（山本五十六）

一方、「ような」によって導かれる修飾句の場合、例(7)のような、「ような」で連結される句の述語にテンスがあり、「ような」が推定の意味で用いられ、修飾句が「気持ち」の内容を表す例がないわけではない。しかし、「ような」が比況の意味で用いられ、修飾句が「気分」「気持ち」の属性を表す、高橋（1979）の属性づけのかかわりにあたる(83)～(87)のような例が多い。

- (7) かなり長時間を要したような気持がする。やがて地面の上に立つことが出来た。
（黒い雨）
- (83) たとえば**くが例の透明な幕に遮断されたような気分**に陥るときがある（楡家）
- (84) それで、天下をとったような気分で家にかえったのだが、…（ブンとフン）
- (85) 要するに、銭湯の壁の絵を前にして湯船につかっているような気分なのさ
（一瞬の夏）
- (86) 彼はじっと見ていられないような気持で度々目を外らせた。（檸檬）
- (87) まるで雨の日に陽のあたる遠い丘を思うような気持で彼はこれからの事を考えた。
（沈黙）

修飾句が内容を表す場合に用いられる「という」と、属性を表す場合に用いられることの多い「ような」の使用数について BCCWJ で検索してみると、次のような興味深い結果が得られた。

	「気分」	「気持ち（ち）」
総数	8,474例	23,438例
～という	128例 (0.015%)	1,832例 (0.078%)
～ような	583例 (0.069%)	631例 (0.027%)

「気分」では「ような」が「という」の4.6倍の使用数となっているが、「気持ち」では「という」が「ような」の約2.9倍の使用数となっている。「気分」が抽象的ではんやりした「気持ち」をいうのに対し、「気持ち」は考えている内容まで表し、また、その内容として具体的な意志や希望まで表すことができるという、徳川・宮島（1972）の指摘に通底する傾向をこれらの数字から読みとることができる。

4. おわりに

以上、共起する連体修飾成分の文法的な特徴に照らしあわせるかたちで、類義語「気分」「気持ち」の意味特徴を分析し、その違いを考察してきた。結果をまとめると、連体修飾成分が一語である場合には、「名詞＋の」において共起成分の違いがみられた。さらに、連体修飾成分が述語句の場合には、述語句の「気分」「気持ち」への意味の関係のしかたにおいて違いがみられた。また、内容を表す「という」、属性を表す「ような」で連結された修飾句で、「気分」「気持ち」を修飾する割合が異なっていた。こうした文法的、統計的な違いは、徳川・宮島（1972）の「気分」「気持ち」の相違についての記述を裏付けるものとなっている。本稿の目的は、類義語の相違を共起関係にある連体修飾成分の文法的な特徴から考察するために、モデルケースとして「気分」「気持ち」をとりあげ、その分析方法の妥当性を確かめることであり、これについては有効性を確かめることができたと考える。

注

- 1) 宮島（1995）参照。
- 2) 韓（1996）、金（2005）、長谷川（2005）、吉田（2005）、久池井（2006, 2009）など。
- 3) 用例末尾（ ）内に典拠名を記す。ただし、紙幅の関係で省略して記していることがある。
- 4) 一語にはこのほか連体詞「暗澹たる気分／気持ち」などがあるが、多くない。
- 5) 国立国語研究所（1972：21-42）を参考。三つの条件をすべて満たしているものだけが感情形容詞であるというわけではない。たとえば「好きな」「嫌いな」は主語の人称制限はなく、「がる」がついて動詞を派生しない。
- 6) 一部内省すると「賑やかな気分」「？賑やかな気持ち」「？客観的な気分」「客観的な気持ち」な

ど不適切だと思われる共起関係が考えられるが、この点は今後さらに用例を増やして検討しなければならない。

7) 第3節 BCCWJ における使用数参照。

8) 村木(1980:18)のターム。実質的意味を名詞にあずけて、みずからは文法的な機能をはたしている動詞を機能動詞と名付け、機能動詞をふくむ、ひとまとまりの連語を機能動詞結合あるいは機能動詞表現とよんでいる。

9) ほかに連体節と被修飾名詞との意味的な関係をめぐる研究には寺村(1975-1978)がある。寺村は、被修飾名詞が連体節内の述語に対して、格関係でむすびつきうる関係か否かで、まずその意味的な関係を内の関係(格関係でむすびつく場合)と外の関係(格関係でむすびつかない場合)に二分している。寺村(1975-1978)の分類にしたがって考察してみるとどういうことがいえるのかについては、今後の課題である。

10) ①～⑤にあてはめられない次のような例があり、その位置づけについては今後の課題である。

(88) それが事実なら、内藤が金など払いたくないと思う 気持はよく理解できる。(一瞬の夏)

11) 新屋(1989:2)のターム。文末名詞文とは連体部を必須要素とし、コピュラを伴い、主語と同値または包含関係にない名詞を述語とする文である。

12) なお、次のような例は、形容詞述語句が「気分」の性質を表しているとも捉えることができ、名詞との意味関係が、属性づけのかかわりを表す場合との境界例といえる。

(89) 嬉しさにじっとしてられない 気分だった私は、…(若き数学者のアメリカ)

(90) 千代子のほうはそうは言われても すぐには笑えない 気分であった。(楡家の人びと)

13) 「その時の気分は、そんなことどうでもいい気分だ」「それは、それを中止されたのが惜しい気持ちだ」など、主語と述語が包含関係あるいは同一関係にあるような、文末名詞文ではない文も想定できないわけではない。

14) 文を終えるときの変化形式、たとえば「だ」「だった」「です」「でした」「ではない」「ではなかった」などを含む数である。

15) 感情を表す動詞には終止形／連体形が「む」で終わるものが多い。寺村(1982:153)によると、この他「喜ぶ」「恥じる」「妬く」「怒る」「嫌う」などがある。また、「愛する」「恋する」等のサ変動詞があり、これらを含む総合的な調査は今後の課題である。

引用文献

韓麗娟(1996)「〈気持ち〉と〈気分〉——用例の分類を中心に——」『愛知教育大学大学院国語研究』4 pp.91-99 愛知教育大学

金昌奎(2005)「「気持ち」と「気分」の意味用法および使い分けに関する研究」『日語日文学』27 pp.35-46 大韓日語日文学會

久池井紀子(2006)「「気持ち(が)いい／悪い」の意味記述——「気分」と対照させて——」『杏林大学

- 国際交流センター附属日本語研修課程紀要』 1 pp.29-42
- (2009) 「「気持ち」と「気分」の意味記述 —— 「いい／悪い」以外の場合 —— 』『杏林大学国際交流センター日本語教育研究』 3 pp.45-63
- 国立国語研究所 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- 新屋映子 (1989) 「『文末名詞』について」『国語学』 159 pp.1-14 国語学会
- 高橋太郎 (1979) 「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」『言語の研究』 pp.75-172 むぎ書房
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味(1)-(4)」『日本語・日本文化』 大阪外国語大学留学生別科 寺村 (1992) 所収
- (1982) 『シンタクスと意味 I』 くろしお出版
- (1992) 『寺村秀夫論文集 I —— 日本語文法編 —— 』 pp.157-320 くろしお出版
- 徳川宗賢 宮島達夫編 (1972) 『類義語辞典』 pp.128-129 東京堂出版
- 長谷川由香 (2005) 「「気持ち」を用いる表現について」『拓殖大学日本語紀要』 15 pp.91-101 拓殖大学国際部
- 宮島達夫 (1995) 「形容詞の名詞かざり」『現代日本語研究』 2 pp.1-38 大阪大学文学部現代日本語学講座
- 村木新次郎 (1980) 「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告65 研究報告集』 2 pp.17-75
- 吉田妙子 (2005) 「「気持ち」と「気分」の意味素性分析」『台湾日本語文学期』 20 pp.291-314 台湾本語文學會

【考察対象の用例の出典】

阿川弘之『山本五十六』(1965)／芥川龍之介『羅生門・鼻』(1917)／有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』(1916)／有吉佐和子『華岡青洲の妻』(1967)／安部公房『砂の女』(1962)／赤川次郎『女社長に乾杯!』(1982)／石川達三『青春の蹉跌』(1968)／石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』(1946・1948)／井伏鱒二『黒い雨』(1966)／伊藤左千夫『野菊の墓』(1906)／井上靖『あすなろ物語』(1953)／井上ひさし『ブンとフン』(1970)／五木寛之『風に吹かれて』(1968)／遠藤周作『沈黙』(1966)／大岡昇平『野火』(1951)／大江健三郎『死者の奢り・飼育』(1957・1958)／川端康成『雪国』(1935)／梶井基次郎『檸檬』(1925)／開高健『パニック・裸の王様』(1957・1958)／北杜夫『楡家の人びと』(1964)／倉橋由美子『聖少女』(1965)／小林秀雄『モオツァルト・無常という事』(1946)／沢木耕太郎『一瞬の夏』(1981)／志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』(1920・1917)／椎名誠『新橋烏森口青春篇』(1985)／塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』(1983)／曾野綾子『太郎物語 大学編』(1976)／谷崎潤一郎『痴人の愛』(1924)／太宰治『人間失格』(1948)／竹山道雄『ビルマの堅琴』(1948)／立原正秋『冬の旅』(1969)／筒井康隆『エディプスの恋人』(1977)／福永武彦『草の花』(1954)／藤原正彦『若き数学者のアメリカ』(1978)／星新一『人民は弱し官吏は強し』(1967)／松本清張『点と線』(1958)／三島由紀夫『金閣寺』(1956)／宮本輝『錦繡』(1982)／村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985)／吉行淳之介『砂の上の植物群』(1964)／吉村昭『軍艦武蔵』(1966)／渡辺淳一『花埋み』(1970) [以上、CD-ROM

光 信 仁 美

『新潮社の100冊』（1995）新潮社より]

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ：Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）』

（みつのぶ・ひとみ 英語国際学部准教授）